

みことのよくに
あづまのそらや
ひがしをとなひて
かのたちばなの
そのみこゝろの
みさほのはどこそ

つたはりて
あづまぢと
かぐはしき
ひめぎみが
あさからぬ
おもひやれ

御代ほぎ

光あまねき 朝日かげ
玉しく庭も 賤が家も
おなじ恵に てらされて
ともに樂しき 御代なれや

朝日照り添ふ 浦安の
國も靜かに 治まりて
外國人も 日の丸の
旗を立てぞ 祝ふなり

つねを

若き人のわづらひ

小林 兩峰

若き人ありけり、その人の面白く、其の人の
姿、楚々たりき、言清くすきいりて、高潮の
すぎゆくが如し、其の人、想に沈みて悲みに
かなしみて、なげきぬ、星の遠きみ空にくた
る夕、かくわれにものかたりしかば、そのま
ゝ、かきしるしぬ、

若き人の心の奥にかよふ氣はやはらかなり、そ
の心をめぐりて流るゝ血は桃色にしてかぐはし、
若き身にかよふ血まことにやはらかなれば、そ
の熱さを限りなし、されば一たび其のやはさ、あ
つさ若き身のそれに觸れば、身に秘めたる緒琴は
ひびきをつたへて、野の白百合、かすけき曙のけ
あひも、およぶべくもあらぬかし、

この若人たては、そこには、若き人の世あり、
 しかも樂けなる世は花咲き亂れたる花壇のそれに
 向ふか如く、光れる星のきらめき渡れる大空の高
 さに對するその如くも見ゆ、

かくてこの若き人のたてるあたりには、一たびか
 なづる緒琴の響に耳かたむくる人は、あらゆる感
 情は惹起され、或ひは愛ひて悲みに沈み、あるは
 花やかに樂しく快よくせられ、而かもそのうちに
 光明を仰ぐとすら得らるゝとぞさく、

この若き人は、或時野末に立ち出て、仰きては
 俯し、俯しては仰きつ、かの一條の小徑のかたな
 る若草をは眺め入しに、草の勾ひの高き、青き其
 色のたえなる、いたくもこゝろ動かされぬ、

若き人の情には、そののみならず、ふかくもさら
 に感しいりぬ、目に入りしもの耳に觸しもの、蝶

に薫に、百囀りの群鳥、何れも感起さしめぬ、そ
 は、かゝるものに對して、現の相よ、現の形あゝこ
 は眞の姿にはあらずと、

小さき花片何處ともなく、軽く舞來りてわかき
 人の前に散りぬ、若き人はそを軽く手にとりて、
 接吻しつ、可愛き花片よ、汝のかくには秘めたる
 廣き不滅の宮の鎖され居るに、人はその奥深き宮
 居の扉開かんとせざるとの哀なるをよ、

不滅の生命こそげに、眞の姿とは云ふなるべき
 に、世にありて見るべきことの多き、聞くべきと
 の澤なる、思ふべきを憂ふべきとある、そは不
 滅の生命の理の表はれし姿のそれなるに、世の人
 は影のみを提へんと焦慮つゝあり、何にとてかく
 も淺ましきぞ、

野に咲ける春の花くさくにして、うつくしと

のみ愛づる世の人、色彩のみみて、何を笑むなるか、色彩の外に秘めたる精神を深く眺めざる、色彩を解き剖きて、たゞ美しとのみ感ずるは眞に心あるものゝ爲すべきをかは、

若き人、更らに俯むさまた口を開きて謂けらく、琥珀の光れる御殿にこそ、花の色もまたき姿はあるなれ、そこには世の人の希なる樂しみなく、厭ひ捨つべき憂きと歎くべきと露あるなきを、

彼處にはものゝ面みなてりはひて、光明あり、「日輪の凍水を溶かすが如く、あらゆる不平等を溶かす」べき愛の深き衣褰は白く、紫の色なしてゆるやかに薫ほりをあたりて散しぬ、欄干のあなたにありきゆくととき、紫藤、ゆかりの色なして

水の面に映ふにもまして、いとつや／＼し、若き人は瞑目しつゝ胸の中何やら別に天地の

開けさるものありたらんが如く、歩を進めて、やかて、彼方を指し、

光りし星影の黒なりて、ゆるやかなりし、潮路狂ひ馳せ、嚴平き巖角に船を擡ぐ磯邊にたてるおのが家、おもはるゝに、嘗つてはわが母、おのが子の世に出て、たよりなき黄雲のされ／＼となりしこたくふべくつれなくなりしを啣ちむひかの金星の光り一つ閃きわたる夕門の戸に倚りそひて、わが子のいま冷き磯の上に凍れる石を枕として寝ぬるらんを思ひ玉ふにと心に浮び來るのとき、われはひたぶるに、先の如き思は亂れそめぬ、

若き人思に沈みぬ、

現相のかきりなき束縛をさりて、永劫のうちなる實の相のうちにはたぢはるゝを得んにはいかにかすべき、花の一片はわれに教へを授けしに、

かくもわれはまた思亂れんには、いかにして、わが心の歸趣を定めて、流れのあなたに掉し、眞の岸にゆかんはいかにかせん、

あゝわれはしらし、あゝわれはしらし、あゝ暗き谷間向ひの山の頂にゆかばいかに、

怕しき猛き獸の吼ゆる音、谷間にひびきて、われを襲はんか、われはかくて、いかにすべき、雲に似たるわが、わずらい、拂へどもきたりて、避けえじ、……………

若き人は花片を抱いて、泣きふしぬ、

お年玉

(前號の續)
金田みず子

菊子は何時にも無い清々とした美しい眼貌で、雪ちやんの爲に拵て置いた、件の針箱を兩手に持つて、

出て來ました。

此を雪ちやんの側に置ながら、「此は私のお年玉ですよ、もつと良物なら好んですけれどもねー」

「アラマー、好針箱ですことー、お婆さん、本當に私にくださるの？」

「誰も外の人に遣るんじやーないんですよ、雪ちやんに上るつて拵いて置いたんですものー、」

雪ちやんの眼の中に輝いて居た涙の粒は、此時消へ去つて、兩方の頬に鬻か二つ現れました。

雪ちやんは、此針箱の抽斗を上からだんく下へ開けて、見て行きました、此度は抽斗を皆引抜

てしまつて、中に入つて居る品を一つ一つ炬燵の蒲團の上へ並べながら、

「此はお婆さんのお衣裳の切ですか、奇麗ですことー、」